

僕が成城の幼稚園児だったころ

田 嶋 信 雄

僕が成城幼稚園に入園したのは一九五七年（昭和三二年）四月のことであった。僕には六歳年上の長兄（博雄）と四歳年上の次兄（俊雄）がいて、彼らはその時それぞれ成城学園初等学校の四年生（藤組、田沢与光先生担任）と二年生（檜組、横山昭作先生担任）であった。

僕の同級園児には「まっおゆうじ」君や「いまいなおこ」ちゃんがいた。「まっおゆうじ」君はその後ラビグーの「松尾雄治」氏となった。「いまいなおこ」ちゃんはその後結婚して「青柳」姓となった。現在の成城学園教育研究所書記・青柳恵介氏の令夫人である（という事実はその後三〇余年たってから青柳さんとの雑談のなかで偶然判明した）。

『成城教育』前号（九二号）の特集「成城学園の戦後五〇年」の「成城学園戦後教育史年表」を見ると、僕の

入園した一九五七年の一〇月の頃に「幼稚園特別保育室竣工」とあったので、すぐに『成城学園五十年』の次のような記述を思い出した。

昭和三十二年、創立四十周年記念事業として特別保育室を造ることになった。建てる場所は幼稚園のプールのあった南側の場所と決まった。

特別保育室は水彩画の部屋とママゴトの部屋である。坂の下に造るようになるので、「幼稚園の本校舎と下の部屋をつなぐのに階段でつながだけではおしい」と、柴田校長は、半分はすべり台にしたがよい、という意見であった。半分は階段で上り下りができるようにし、半分をすべり台にして造った。これは大成功だった。すべては階段を上り、なんべんもあきないでたのしんでいた。初等学校の生徒もかえり道には「ちよつとすべらせてよ」と、よっていくのである。（五六四ページ）

この滑り台については今でもまざまざと覚えている。僕も、厭きもせず繰り返し階段を上がっては滑った。約三〇年後にまったくの偶然で成城大学に赴任したとき、幼稚園を覗いてみて、「なんだ意外と短かったのだな」と

思ったが、当時はまさしく遊園地の巨大な造営物のごと
きに思われたのであった。なお、上述の「ちよつとすべ
らせてよ」と寄っていた初等学校の生徒の中に僕の兄
どもがいたことはほぼ九九パーセント疑いのないところ
である。

蛇足ながら、『成城学園五十年』には、次のような記述
もある。

昭和三十四年、父兄のかたで都立大教授をしていられ
た田島栄氏の紹介で、マドリッドの幼稚園と成城幼稚園
のこどものかいた絵の交換をすることになった。

マドリッドからきた絵は画用紙の資質も大きさもまち
まちで、色鉛筆でかいてあった。風景画と人物の絵が多
かった。

成城から持って行ってもらった絵は、乗物、人形が多
かった。紙は大きな画用紙を使っているし、日本の方が
はるかに物が豊富なかんじがした。(五六六ページ)

恥ずかしながら、ここで「田島栄氏」とは僕の父のこ
とである。ただし、先日父に聞いてみると、マドリッド
と成城を取り持ったのは自分ではないとのことであった。

拝見し、僕は初めてその理由に触れ、いたくつかしく
思ったのであった。

中埜邦夫先生のお書きになった理学部の創設と廃止の
問題も、内容の「重さ」にもかかわらず、現在からの「総
括」「教訓」という観点からよりは、「自分の幼稚園入学
前約一〇年の成城はこうだったのか」という私的な観点
から読ませていただいた。先生のお書きになっているよ
うにこの事件は「成城学園の歴史の中で最大の汚点、
すくなくともその一つと言えようが、終戦直後の成城お
よび社会の混乱がいきいきと叙述されている文章として
も「楽しませて」いただいた。

またコラムでは若菜伊奈緒先生の「喜多見寮のこと」、
横山泰三先生の「旧哲士寮物語」が泣けた。これらはも
ちろんどちらも幼稚園の先生の話ではないが、いずれも
僕や兄たちが成城にいたころの先生方の生徒指導と生活
の困難についての話である。若菜先生の「生まれてから
銭湯などに入れたことのない娘をなぜ連れていったのか」
と抗議した母親の話は時代を感じさせて微笑ましいし、
また、横山先生のコラムは文字通り「息を殺して」読ま
ざるをえない迫力に満ち満ちていた（まだご覧になって
いない方は是非お読みください）。

父は当時確かに外遊はしており、しかも当時外遊は一般
にはまだ珍しい時代であったから、『成城学園五十年』の
幼稚園部分の著者（たぶん弥富先生であろう）が何らか
の勘違いをされたのかもしれない。それはともかく、僕
はこのような成城幼稚園時代を送ったのだった。

* * *

なぜこのような今まで文章にすることなど考えてもみ
なかつた埒もないことを書いたかというところ、「前号を読ん
で」を執筆するためにいざ「成城学園の戦後五〇年」を
めくったとき、各論文・記事をほとんどまったく「客観
的」に読むことができず、我ながら本当に愕然としたか
らである。

たとえば、特別寄稿の堅山佳器先生による「成城ボー
イスカウト盛衰史」。当時僕の兄達はボーイスカウトに参
加してはいなかつたが、特に次兄が「成城のボーイスカ
ウトは第一隊なのだ」とかなり誇らしげに僕に語ってい
たことを今でも良く覚えていいる。きいてみると東京だか
日本だか知らないが、「とにかく一隊」なのだという。な
ぜだかはわからぬが「とにかく一隊」なのだという。僕
は「とにかく成城のボーイスカウトは偉いらしい」とい
う印象をその後も持ち続けることになるが、この論文を

短いながらも僕にとって圧巻だったのは同級生「いま
いなおこ」ちゃんの後夫である青柳恵介氏の「仙川
の氾濫」であった。仙川一帯は当時は非常に水はけが悪
く、いつもぬかるんでいた。当然子供たちはいつも泥だ
らけとなる。しかし成城ではだから泥遊びは止めろとは
ならなかつた。僕の母は三人も成城に通わせているわけ
だから何時も洗濯物の前で嘆いていたのである。あとで
聞いてみると、泥だけならまだしも、ポケットのなかに
しばしば虫やザリガニが入っているのには閉口したとの
ことである。その仙川はしばしば氾濫した。青柳氏は昭
和三三年の「狩野川台風」や翌年の「伊勢湾台風」のこ
とをお書きになっているが、まさに「田嶋三兄弟」が成
城の幼稚園と初等学校に通っているときのことなのであ
った。僕が「そうだったよなあ、そうだよなあ」と呟き
ながら共感して読んだ所以である。

毛利三彌先生のいう「大学が沸き立っていたとき」、僕
は高校生、兄達は大学生となっていたが、いずれも在籍
したのは成城ではなかつた。このテーマについては、僕
は別の理由から「客観的」なことは書けない。ただ、毛
利先生が「一九六八年に始まった「大学紛争」は、本質
的に、この沢柳的教育を要求した運動であったと、わた

しは理解している」という一節を読んだとき、思わずヘルメットとタオル・軍手姿の沢柳を想像し、苦笑してしまつたのである。

その他の論文・コラム・講演などの記事でも、僕は、個人的な体験に近い観点から様々に揺り動かされて読むところが多かった。ここに直接引用出来なかつた非礼をお詫びしたい。

*

*

*

実は僕の商売は、大学での教育と並んで、歴史を「客観的」・社会科学的に研究することであつて、事実昨年などは各種の「戦後五十年を考える」式のシンポジウムの類に駆り出され、第二次世界大戦の「再検討」だとか「再構成」だとかをしたり顔で語つていたのだつた。僕に「成城学園の戦後五〇年」に関わる「前号を読んで」の執筆話をもちかけた岩見さんの意図もおそらくその辺にあつたのだろう。しかし、いざ読んでみると「客観的に再評価」する立場はあつというまに吹き飛び、どの論文・記事を読んでも非常な興奮状態に陥つてしまつたのである。まったく「現代史」というものは客観化することがむずかしいことを、理屈ではもちろん百も承知であつたが、今更ながら改めて実感した次第である。編集部の期

待に背き、縷々述べた理由から視野の極度に限定されたまத்தくの私的な感想に終始せざるを得なかつたことを編集部ならびに前号のすべての筆者ならびに読者にお詫びしたい。

ただ、それにもかかわらず一点だけ歴史家としての意見を書かせていただくのをお許し願いたい。それは、成城学園にはこのさい是非とも「学園アーカイヴス（歴史文書室）」が欲しい、ということである。これについてもはや論じるスペースがないが、いずれ広くご検討いただきたいと思う。

（たじま のぶお・法学部）

